

# 平原遺跡の方位と伊都・豊の姫島卑弥呼論の前提

20231217 考古天文学科 研保立道久

## はじめに——「かみ（神）」について

「伊香保嶺に <sup>(かみ=雷)</sup>可 未な鳴りそね 吾が上には 故はなけども 兎らに因りてそ」  
(『万葉集』)

力は輝くの「カ」で強力な光線。林兼明『神に関する古語の研究』  
ミ＝「身・実」説。大野晋『日本語をさかのぼる』  
五世紀以前の首長、「原始の王」の名の語尾「ミ」  
(溝口睦子「記紀神話から縄文・弥生を探る」『文学』一三巻二)

## Ⅰ 卑弥呼の実像と名義——原田大六説から

### ① 箸墓古墳と三輪山の雷神

<sup>ヤマトトトヒモモソ</sup>  
倭 迹迹日百襲姫命

箸墓古墳由来の円筒型器台＝雷文（春成秀爾『祭りと言術の考古学』）  
前方後円墳＝壺型火山墳。火山噴火＝火山雷

### ② 纏向宮室と龍文の王衣・銅鏡

宮殿建物

纏向遺跡の大型宮殿建物 D、中心軸、箸墓古墳と齋槻岳  
箸墓や齋槻岳に昇龍のイメージ（北條二〇一七、一三八頁）。  
奈良佐味田宝塚古墳出土の「家屋文鏡」

龍文の銅鏡と月光——「銅鏡百枚」

七八〇年「西大寺資財流記帳」に薬師寺薬師三尊に計三四八面もの鏡  
「我妹子や我を思はばまそ鏡照り出づる月の影に見え来ね」（『万葉集』⑪二四六二）  
日羅。放光する身体＝十二月晦日に光を失ふを <sup>うかが</sup>候ひて殺しつ（『日本書紀』）

「日迎えの神事」山から覗く「龍＝太陽」

鏡の使用法＝鏡を櫛に懸けて輝かせる  
原田大六『実在した神話』  
纏向からの「日の出」暦（北條）

龍文の王衣——「絳地交龍錦五匹」

赤地に龍が交わる様を描いた錦の絹織物  
<sup>トトヒモモソ</sup>  
倭迹迹日百襲姫命という名のモモソ＝「百衣」

(原田『卑弥呼の墓』二七二頁)

『肥前国風土記』肥前国（鳥栖市）の <sup>ひめこそ</sup> 姫社社の由来譚。

荒ぶる神の神意を知るために「<sup>はた</sup>幡」をささげて風に放ち、神の在所を知る。  
夜の夢に臥 <sup>くつびき</sup> 機（韓国風の織機）と <sup>たたり</sup> 綵（糸繰り具）が踊り出て。女神であることを知る。

### ③ ヒミコの名義——ヒメコ（ヒメ）・ヒメコソなどと通ずる一般名詞

古代韓国語＝イ段とエ段の発音区別が曖昧、倭語もその影響下（沖森卓也『日本語の誕生』）。

『延喜式』（神名帳、阿波美馬郡）に「波尔移麻比彌神社」

ミ（そしてメ）はカミに代わって託宣をする人、巫女 <sup>まし</sup> のミ

コは新羅の始祖王、赫居世の居世と同語で韓国語の「在ます」（kion）に語源する敬称  
(三品彰英「アメノヒボコの渡来」)

ヒ。『類聚名義抄』は「映暎——ヒカリ、カガヤク、ヒラメク、ヒル」

(土橋寛『日本語に探る古代信仰』)

動詞ヒルの名詞形ヒレ＝領巾、浪や風を自由に起こし鎮める気象に働きかける呪物である

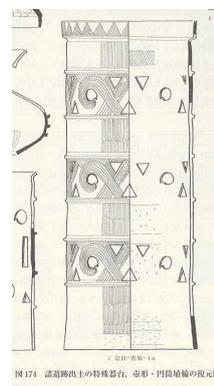
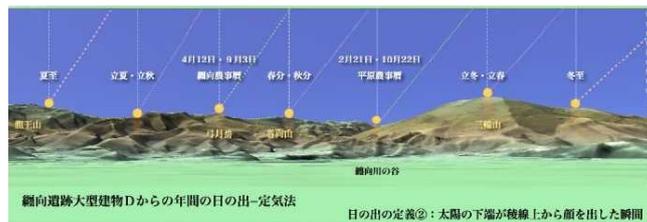


図174 淡路島出土の特殊器台、彩色・円筒形輪の板元図



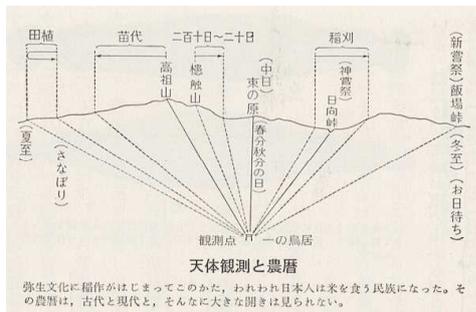
纏向遺跡大型建物Dからの年間の日の出一定気法  
日の出の定義②：太陽の下端が後線上から顔を出した瞬間

と論ずる。

# III 伊都国のヒメコソ神と天日矛神話

## ① 筑前怡土郡平原女王墓と雷山

女王墓の南に聳える背振山地の高峰、雷山（原田『卑弥呼の墓』）。  
対馬の雷山が『万葉集』（⑭三五・一六）では「可牟の嶺」（神嶺）  
右の原田が作った女東側の櫓、触山から太陽が上るのが二一〇日  
筑紫の由来＝「そらみつ倭国は皇神の伊都久志吉国」（山上憶良『万葉集』）



平原王墓と東の山地の「日の出暦」      平原王墓と雷山の方位関係（北條作成図）

## ② 天日矛神話とヒメコソ・ヒミコ

伊都国の地である怡土の県主の先祖、五十跡手は「高麗国の意呂山（新羅の蔚山）に天より降り来し日杵の苗裔」と自称（『筑前国風土記』逸文）

アメノヒボコの物語。『古事記』（応神記）

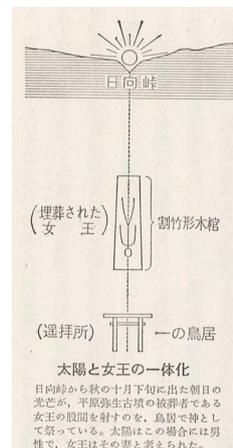
新羅のある沼の岸で「賤しき女」が昼寝をしていたところ、その上に「日の耀」が「虹」のようにかかって「陰上」を射し、その結果、女は孕んで「赤き玉」を産み落とした。この「赤き玉」は新羅の王子の手に渡る。「美麗しき嬢子」になって「婚」。「凡そ、吾は汝が妻となるべき女にあらず」と宣言して「わが祖の国に行かむ」と言い返して日本に渡る。難波の比売曾社に鎮座する女神、阿加流比売神となったという。

比売許曾神社は『延喜式』（四時祭十一月条）には「下照比売社」

「下照比売」は大国主命と宗像の奥津宮の多紀理比売の間の子ともとされる味鋸高彦根神の妹（高比売）。宗像の神で、しかも女性の雷神。

彼女の父が「虹」であったことに対応・「虹」とは、『説文』に「状、虫に似る」

原田は、この天日矛神話によって平原女王墓を解釈した（『実在した神話』一四章五節）



## ③ 伊都国の姫島——ヒメコソ女神の上陸地

ヒメコソの最初の上陸地。伊都国の糸島半島先端の姫島（『古事記伝』五卷二四葉）

イサナミの国生み神話にでる女島。

吉岐原の辻遺跡、糸島半島の南の深江城崎遺跡から鯨漁の絵の土器

原田は一時イサナミ・イサナキのイサナは鯨であるとした

伊都国と韓半島との交易は吉岐の原の辻遺跡を中継（久住猛雄「博多湾貿易」の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交易機構」『考古学研究』53(4)、二〇〇七）

# III 邪馬台国東遷と「豊国」・宇佐

原田＝邪馬台国東遷説。近藤義郎「古墳発生をめぐる諸問題」一九六六『日本の考古学

・古墳時代（下）』も賛同

天日矛神話＝ヒミコ東遷を反映。

## ①国東半島の姫島と北九州のヒメ神——ヒメコソ女神の広がり

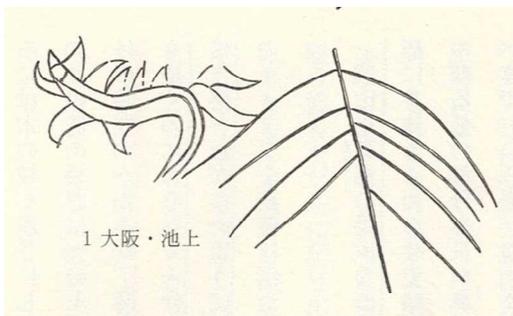
川村湊『海峡を越えた神々』  
肥前基肄郡——織姫の性格をもった姫社社<sup>ひめこそ</sup>  
水縄山地の北——日田——宇佐または別符——国東半島を回れば「もう一つの姫島」  
伊波比の比売島（『摂津国風土記』）＝豊国国前郡比売語曾神社（『日本書紀』垂仁三年）  
ヒメコソ神の分布圏＝卑弥呼の伝承  
伊都国姫島神、高祖山の高磯姫、肥前姫古曾神社、国東半島の姫島女神  
ヒメコソ女神、国東半島姫島——祝島から防予諸島——安芸（呉市）龜山神社——吉備（岡山総社市）姫社神社（秦氏の集落）<sup>ひめこそ</sup>

## ②豊比咩＝台与の分布

筑後御井郡の高良神社（高良玉垂命神社）。高良玉垂命・豊比咩は同体<sup>かわら</sup>  
豊前田川郡香春岳の香春神社。辛国息長大姫大目命・忍骨命・豊比咩<sup>かわら=かはる</sup>  
（中野「宇佐宮と八幡信仰の源流」平成10、『八幡信仰と修験道』）  
香春神社は『豊前国風土記』では「新羅の国の神」が開いたといわれる。<sup>かわら</sup>  
豊後宇佐八幡宮が、応神天皇・息長足姫大王・比売大神  
これは邪馬台国東遷の中で「豊国」がどこに位置するか。そして宇佐をどう考えるかという日本史上、日本神道史上の最大の問題に関係してくる。

## おわりに

邪馬台国東遷の中での「豊国」の位置。  
宇佐——日本神道史上の最大の問題の一つに関係。  
ヒミコの出身地はどこか——ヒメコソ分布圏の中のどこか  
①前方後円墳が壺型火山墳であるという点から行くと、阿蘇・九重・鶴見と火山の連なる豊国は重要な候補。  
②忍骨尊、つまり高千穂に降臨したホノニニギの父のオシホミミが香春神社の祭神にいること。宇佐にオシホミミがいたか？  
③台与＝豊比売はヒミコの宗女とある。  
④『隋書』のいう「秦王国」の宇佐近辺にあるという記述。中野幡能さんのいう宇佐の韓国との深い関係。



1 大阪・池上